

精神分析学と幼児の教育 (Ⅲ)

— 児童分析と幼児の教育 —



北 見 芳 雄

(1) 精神分析療法

既に述べたように、精神分析学は神経症の治療法に始まり、その技法上の発達を裏付けとして体系づけられた科学であるため、精神分析学を正しく理解するためにもまた治療以外の領域への応用を考察するにも、分析療法自体の正確な知識が必要となる。

通常おとなの精神分析療法は、自由連想法とよばれる技法を基本として進められる。患者は寝椅子に楽な姿勢をとって横になり、その場で頭に浮かんできたことを取捨選択することなく語ること(自由連想)を約束させられる。

極端な例をとれば、患者が分析者の顔にスマミがついているのを見つけ、それについてまず感想や批判が起きたとすれば、そのことから話し始めることになるわけである。これが日常会話の場合なら、患

者はおそらく初対面の分析者への遠慮やエチケット、またその来診目的などから、分析者のスマミについて浮かんでくる連想は一応心の隅に押さえつけたままで別の話を進めてゆくことであろう。つまり

会話では、話し手の自我(理性)は外界や超自我への配慮からエス(感情や欲求)の動きを統制し撰択した上で言語化しているのであるが、自由連想法では自己の批判的傾向(抑圧)を自発的に除いて無意識(エス)の動きのままに連想を流してゆくのである。勿論自由連想中でも患者の抑圧が文字通りに解消するというようなことはありえない。抑圧は人格構成の基礎条件としての心の奥深く無意識的に働いており、この人格深部の心的葛藤の処理方法の相違はいろいろな性格傾向を結果することで恒久化しているので、本当の意味での(好ましからざる)抑圧の解除は患者の性格的防衛をも分析的に操作することによって初めて可能となるからである。精神分析療法とはこのような、患者の根深い抑圧を徐々に解消しつつ患者にそ

の無意識的な葛藤のあり方やその不合理な処理方法を洞察させ抑圧に代るより健康な自我の働きによってそれらの葛藤を処理しうる力を獲得させるまでの過程なのであって、その間の分析経過に伴う患者の変化に応じて複雑な分析技法が必要となるのである。分析療法にはつきものと考えられている「解決」にしても、現在ではその主力は患者の自我が不安や恐怖から無意識的にエスの表出を抑圧している。自我の「抵抗」を除くことにおかれているのであり、エス内容や象徴を直接解釈することは、むしろ分析の後期に至って患者の自己の問題への洞察力が十分に用意されてから行なうのが現代精神分析療法の原則的なあり方なのである。したがって軽症の場合は、表面上では何ら特別の解釈を行なわなくても患者の自由連想を手際よく誘導することでその症状を解消しうることもあるのである。

患者に正しく自由連想を行なわせ、これを正確に理解しうるためには、当然分析者側にも周到な準備と条件が必要となる。分析学の専門的な知識はいうに及ばず、患者を心理的に充分受容しうる分析者自身の心の統制や柔軟な態度などの外分析室の物理的諸条件もできるだけ一定に保つことが必要である。

(2) 児童分析

子どもに精神分析療法を行なう場合も原理的にはおとなの場合と何ら変わるところはないのであるが、分析技法としては当然大きな相

違点が生じてくる。子どもはまだおとなでの分析療法の中心となる自由連想法に応じられるだけの十分な内省力や言語による発表能力をもっていないからである。もちろん子どもでも小学校上級以上の高年令児になると自由連想法に準じた談話形式をとることも可能であるが、小学校下級以下の幼児の場合はこれに代るものとして普通子どもの心理が自然に捕えられる場としての遊びを利用する。「遊戯療法」*が広く採用されている。

遊戯室に入った幼児は治療者から何でも自由に遊んでよいことが告げられる。遊戯室には子ども用のテーブル、椅子などの外、積木、絵本、人形、動物、笛、太鼓、クレオン、絵具、黒板、ままごと、ゲーム、自動車、飛行機、電車などの室内遊具のほかネットや水あそび、砂あそびのような汚す遊びやピストル、鉄砲、刀のようないわゆるよくない遊び道具も用意されている。これは遊戯療法の目的は遊びの指導ではなく、自由な子どもの遊びを通して子どもの心理的葛藤を理解すると共にまたそれを利用して子どもに抑圧されている退行（赤ん坊）の願望や攻撃的衝動を解放させ治療者との遊びや人間関係を通して徐々にそれらを処理させることにあるからである。

遊戯療法においてはおとなの分析療法の場合以上に治療者には幼児との間に親密な感情関係を作ることが要求される。なぜなら幼児は少なくとも当初はおとなのような、自己の病気に對する自覚や治療意欲を持っていないのが普通だからである。正統的な児童分析技法を樹立したとみられているアンナ・フロイド*はとくにこの親密な

感情関係を重視し本格的な分析治療が開始される以前に子どもに分析者が理解があつておもしろくかつ有用な存在であると認めさせ、児童と分析者との間に信頼―依存的な関係が成立するための「導入準備期」が必要であると説いている。

こうして子どもに治療への興味が生じ分析者への警戒や不安がとれ、遊戯療法の数回が重なるとおとなにはみられない顕著な行動上の変化を伴ってくるものである。これは前にも述べたごとく幼児はまだ性格の形成過程にあるのでその超自我はおとなに比して柔軟で分析者の働きかけに応じて容易に変化をきたし易いし、また幼児では意識と無意識、現実外界と心的内界もなお未分化な融合状態にあるので、遊戯療法の場合での新しい心的体験が直ちに現実生活での変化につながってゆく傾向が強いからである。したがって、治療上の「解釈」も幼児にあつては言語によること以上に分析者の表状や態度〔例えば行儀のよすぎる（防衛の強すぎる）幼児がオズオズと刀に手かけた時に微笑によって分析者の肯走を伝える〕とか、分析者が幼児の遊びの奥に秘む葛藤に治療の効果を及ぼす方向で遊びの内容に参加する（例えば恐怖症の幼児が火事場面の空想的遊びを繰り返す時に分析者が幼児と一しょに消防車を繰り出し火事を有効に鎮火させることに自信をもたせる）など直接言語によらない象徴的行動的な表現が大きな効果をもちうるのである。この点児童分析では成人分析の場合以上に幼児の細かな行動の無意識的動機や意味を適格に捕えてこれにすばやく応じうる能力が要求されるともいえ

るのであろう。

児童分析がおとなの場合と異つた他の大きな点は、子どもの治療と平行して多くの場合親とくに母親との面接が行なわれることである。これは子どもの問題や治療に伴うその変化を聴取するというところに止まらず、親が自己の超自我のあり方を洞察し、その躰けの態度を改めることがそのまま幼児の改善となって現れるからである。したがって幼児の単純な症状が親が変化することだけで自動的に解消しうる場合もあるのであるが、また一方親との面接で親の問題点をはつきりしてゆく過程で親自身の治療への抵抗が強まり、子どもともども治療を中断させるというような事態も生じうるので、親の面接にはおとなの分析治療同様の配慮が必要となるものである。

(3) 精神分析学と幼児の教育

幼児の問題は多くの場合親の躰けの失敗や親自身の問題と関連しているもので、児童分析はいわば親が自らの問題点を洞察し子どもに対する好ましいあり方を獲得するまでの期間、分析者が心理的な親代りとなって子どもを扱うということにもなるので、児童分析は本質的に子どもの躰けや教育の問題に関係するのみならず、また児童分析を通して幼児と親との関係の変化を観察しうることから、子どもの正しい躰けや効果的な教育のあり方に対しても大きな貢献をなすに至り、いわゆる精神分析学的発達心理学を構成することによつ

て従来からの心理学や教育学と密接な関連をもつに至ったのである。この面でも最大の貢献といえるアンナ・フロイドは精神分析学の教育への貢献を要約して、精神分析学は子どもの無意識の研究によって子どもの精神生活についての教育者の認識を拡大し、子どもとおとなである教師との間の複雑な関係に対する理解を深めたが、一方治療としての児童分析は教育の過程で子どもに加えられた損傷を治療する役割りを果し既成の教育のあり方に批判を行なった、と述べている。

次に幼児の教育に際して、精神分析的な観点からみて教師として留意すべき事柄を若干あげて本講座を閉じたいと思う。

一、教師のあるがままを心理的に受け入れること——児童分析の初期段階で典型的に観察されうるように、幼児は信頼するおとなにのみ心の扉を開くものであるから、教師が教育の開始に当って一応幼児をそのままの姿で受け入れられることが、望ましい教育効果をあげうるための先決条件である。

二、教師は幼児の好ましい超自我対象となるべきこと——幼児は親の超自我を摂取しつつある過程にあるので、教師はその好ましい発達を助長すると共に一方好ましくぬ超自我の形成されつつある場合には、教師が新しい超自我対象となることによって幼児の不健全な超自我を比較的容易に修正しうることになる。この意味で幼稚園教師は幼児をよりよい方向に教育すると同時に、自覚すると否とに拘らず幼児に対する治療や予防的效果をも果していることになる。

のである。

三、幼児の性格の理解と改善のために遊びを利用すること——遊びは幼児の生活そのものであるばかりでなく、また心理療法的働きをも果すものであるから、幼稚園での遊びは幼児に可能な限り広い機会と撰択の自由を与えると共に、また遊びの遊戯療法的活用を工夫することが望ましい。

四、幼児にはいろいろなタイプの友人に接触させること——子どもの成長しつつある自我は同年令の友人に接触することによって、自発的に友人の超自我を摂取しながら好ましい性格を形成してゆくことになるので、広い交友を幼児に体験させるようつとめること。

五、教師自身自らの無意識的傾向を理解しそれを自覚的に統御しうること——教師の未解決な無意識的な傾向は子どもに敏感に反映されるので、教師は自己に対する深い洞察をもち子どもとの間に健康な人間関係を保ちうるよう努力すること、教育の根元が愛情にあることは古今に通ずる真理ではあるが、多くの子ども的人格形成に建設的役割りを果すべき現代の教師は愛の信念に加えて愛情の心理的理解と技術を併せ有しなければならず、この点に関して教師が精神分析学から学ぶものには大きなものがあろう。

*アンナ・フロイド著「児童分析—教育と精神分析療法入門」（誠信書房）
北見・佐藤訳